

学校レクリエーションの研究

—福岡県下の高等学校体育祭・運動会
の現状と問題点について—

福岡教育大学 秋 吉 嘉 範

はじめに

運動会が始まったのは明治10年頃で、その歴史は長い。その後いろいろの歴史の変遷を経て今日に至っている。いずれにしてもその時代の要請や社会的背景によって、目標や内容が変わっている。ところが、どの時代にも共通しているのは、競技的性格とレクリエーション的性格を持続してきたことである。

さて、現在の高等学校では、運動会は教科外の教育活動の一領域である体育的行事として位置づけられている。ということは、運動会や体育祭の果す教育的役割を高く評価してのことであろう。

ところが近年の高等学校の運動会や体育祭は形式化、固定化して楽しくないといわれている。また、地域社会との関連も少なくなったようである。そこで、教師や生徒が自らの手で企画、運営し、喜んで参加し、満足感を味わうことの出来る運動会や体育祭が考えられないだろうか、学校レクリエーションという観点から検討してみたい。

I 研究の目的

学校レクリエーション研究の一環として、高等学校における体育祭や運動会の現状を調査し、問題点を明らかにして、学校行事としての体育祭や運動会のあり方を検討しようとするものである。

II 調査の対象・方法・時期

1. 対象

福岡県下の公立及び私立の高等学校125校を対象に調査票を配布した。回答を得たのは102校、回収率は81.6%である。

2. 方法

質問紙法による。調査票の記入は保健体育科教師(主任)に依頼した。集計は公立普通校53校、公立実業校28校、私立校21校に分けて行なった。なお概要を知るために調査校全体102校についても集計した。

3. 時期

昭和47年9月から11月までである。

III 結果と考察

1. 実施状況

表1によると、体育祭や運動会を実施しているのは87校85.3%、実施していないのは15校14.7%である。実施していないのは公立普通校7校、公立実業校7校、私立校1校で

〔表1〕 体育祭や運動会の実施状況

	公立普通校		公立実業校		私立校		全体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
実施している	46	86.8	21	75	20	95.2	87	85.3
実施していない	7	13.2	7	25.0	1	4.8	15	14.7
計	53	100	28	100	21	100	102	100

ある。実施していない理由として、クラスマッチに切り替えたが6校、全校登山に替えたが1校、文化祭及びクラブ祭にしたのがそれぞれ1校である。大牟田市内の6校は学校独自では実

施せずに市内全校で、連合体育大会を年2回開いている。そのため各校は予選をかねた競技会を実施している。全体的にみると、実施している学校が断然多い。また、実施していない学校でも内容的には、体育・レクリエーション行事として別の形でとりあげているようである。

2. 名称について

現在、名称は高等学校によりまちまちである。一般に体育祭、運動会などが多い。

表2によると、体育祭が44校50.5%である。ついで、体育大会23校26.4%、運動会10校11.5%、体育会と競技会がそれぞれ5校5.8%である。体育祭という名称は私立校に多い傾向がある。また私立校には運動会という名称はみあたらない。このような名称は内容を示す場合が多い。(注)以下体育祭や運動会という場合、体育会や競技会を含めて呼ぶことにする。

〔表2〕 名 称

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
運 動 会	8	17.4	2	9.5	-	-	10	11.5
体 育 祭	20	43.5	10	47.7	14	70.0	44	50.5
体育大会	13	28.3	6	28.5	4	20.0	23	26.4
体 育 会	2	4.3	2	9.5	1	5.0	5	5.8
競 技 会	3	6.5	1	4.8	1	5.0	5	5.8
計	46	100	21	100	20	100	87	100

3. 実施時期

表3によると、9月～10月に実施しているのが82校85.3%であり、残りの5校は5月～6月に実施が3校、また春秋2回に分けて実施が2校である。ところが9月～10月実施には問題も多い。まず夏休み終了直後で生徒が規則的な学校生活に慣れていないこと。第二に残暑がまだきびしく、生徒の健康面からみて必ず

〔表3〕 実施時間

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
9～10月	42	91.4	21	100	19	95.0	82	94.2
春秋(2回)	2	4.3	-	-	-	-	2	2.3
5～6月	2	4.3	-	-	1	5.0	3	3.5
計	46	100	21	100	20	100	87	100

しもよい時期でないこと。第三に生徒に企画や運営をさせる場合、時間的に短かすぎるなどである。しかし、一方では体育祭や運動会を早く終らせ、大学受験や就職のための勉強に専念させたいという意図も十分伺える。いずれにしても、生徒が健康で喜んで参加できる時期を検討する必要がある。悪い慣例であれば打破する勇気が欲しい。筆者は5月か11月初旬頃が季節的に最もよい時期ではないかと考える。

4. 実施回数

実施回数は年1回実施が66校75.9%である。公立、私立を問わず多い。年2回実施は3校3.5%、また2年に1回は12校13.8%、3年に1回は2校2.3%。3年に2回は4校4.5%となっている。隔年実施の場合、文化祭と交互に実施しているようである。実施回数は質量によって違うであろうが、年1回はぜひ実施したいものである。

5. 実施日数

〔表4〕 実施日数

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1日型	36	78.3	20	95.2	18	90.0	74	85.1
数日型	9	19.5	1	4.8	2	10.0	12	13.7
無記不明	1	2.2	-	-	-	-	1	1.2
計	46	100	21	100	20	100	87	100

表4によると実施日数は、1日型が74校85.1%と断然多い。2～3日以上にまたがる

教日型は12校13.7%である。教日型は2～3日球技などのクラスマッチを行ない最終日にまとめるような形式で実施している。このような形式で行なえば、クラスマッチと体育祭や運動会を総合的にでき、別々に行なうより、準備や練習なども一度ですむという利点がある。

また、逆に長期間に亘るため運営上盛りあがりに欠けたり、中だるみ現象を起すこともあるようである。

6. 実施日及びその理由

実施日が平日であるか、休日であるか調べたのが表5である。表5によると、平日実施は44校50.6%である。休日実施は42校48.2%である。その内容は公立普通校、実業校及び私立校ともほぼ半々である。平日、休日と決めていない学校は1校である。平日実施の学校のなかで休日から平日へ切り替えた学校が18校20.7%ある。逆に平日から休日へ切り替えた学校は私立校3校だけである。従来は休日実施が断然多かったが、この調査では平日実施が大幅に増加している。

〔表5〕 実施日（平日か休日か）

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
平日	13	28.3	6	28.5	7	35.0	26	29.9
休日から平日へ	10	21.7	5	23.8	3	15.0	18	20.7
休日	23	50.0	9	42.9	7	35.0	39	44.8
平日から休日へ	-	-	-	-	3	15.0	3	3.4
どちらもある	-	-	1	4.8	-	-	1	1.2
計	46	100	21	100	20	100	87	100

平日に実施する理由として、「教科体育の延長であるため」が44校中19校である。ついで「特別に理由はない」が12校、「教師の勤務条件に都合がよいため」が7校、「その他、無記不明」が11校である。その他のなかには学校行事であるため、他の行事との関係のため、

一般の人々の整理に困るため、キリスト教系学校であるためなどである。

一方、休日に実施する理由は、「父兄に多く参加してもらうため」が42校中23校、ついで、「生徒や父兄の要望」が7校「地域社会の要望」が6校、「特別に理由はない」が16校「無記不明」が1校である。

さて、最近福岡県教育委員会の調査によると、父兄を含む地域社会の人たちは休日実施を断然希望しているようである。

平日か休日かを考える場合、問題になるのは、特別に理由がないという28校の主体性のなきである。体育祭や運動会は生徒の日頃の体育・スポーツ活動状況を父兄や地域社会の人々にも知ってもらうよい機会である。また、父兄や地域社会の人たちとの親善を深めることもできると考えるならば、平日より休日の方が多くの人参加が期待できる。問題は教師の勤務条件であるが、年間1～2回の休日出勤は振替え休日によって補償されるはずである。

一方、学校行事の一つとしての校内発表会と考えるならば、わざわざ休日に実施しなくてもよい。生徒自身が競い楽しむのだから、父兄や地域社会の人たちの参加は望まないというなら平日でもよいだろう。

平日か休日のどちらに実施するかは、体育祭や運動会をどのような性格や目的で行なうかによって決定される。その場合、父兄や地域社会の要望や意見にも耳を傾けて欲しい。最終的にはその学校の主体性によって決定されるべきであり、その間の検討が十分なされるべきである。学校レクリエーションの立場から考えると平日でも休日でもよい、むしろ教師や生徒が一体となって、体育祭や運動会の目的を検討し、それに見合う企画、運営にあたることこそ大切である。

7. 目標について

さて、体育祭や運動会をどのような目標で行なうかは重要な問題である。

〔表6〕 目標について

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	46校	%	21校	%	20校	%	87校	%
運動意欲の向上と体力の充実を図る	17	37.0	14	66.7	7	35.0	38	43.7
運動への関心や理解を深める	11	23.9	3	14.3	2	10.0	16	18.4
集団行動を通して社会性を育成する	28	60.9	9	42.9	14	70.0	51	58.6
生徒会活動を充実させる	25	54.3	12	57.1	10	50.0	47	54.0
教科体育の成果を地域社会に公開する	7	15.2	-	-	4	20.0	11	12.6
その他、無記不明	1	2.2	-	-	-	-	1	1.1

(2項目選択)

表6によると「集団行動を通して社会性を育成する」が51校58.6%と最も多い。ついで「生徒会活動を充実させる」が47校54.0%「運動意欲の向上と体力の充実を図る」が38校43.7%「運動への関心や理解を深める」が16校18.4%「教科体育の成果を地域社会に公開する」が11校12.6%の順である。このことは従来のように地域社会とのつながりが深いものでなく、学内の単なる行事として行なう傾向にあるといえる。

いずれにしても目標を定める場合には、どのような性格や目的を持った体育祭や運動会であるかを明らかにし、その目標を生徒に理解させる努力が必要である。

8. 企画、運営について

企画や運営を誰が行なうか調べたのが表7である。表7によると「生徒と教師が協力して行なう」が63校72.4%である。ついで「生

〔表7〕 企画・運営はだれが行なうか

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
生徒が中心に行なう	16	34.8	4	19.1	3	15.0	23	26.4
教師が中心に行なう	1	2.2	-	-	-	-	1	1.2
生徒・教師の協力で	29	63.0	17	80.9	17	85.0	63	72.4
計	46	100	21	100	20	100	87	100

徒が中心に行なう」が23校26.4%、「教師が中心に行なう」はわずか1校である。

教師のアドバイスを受けながら、生徒が中心に企画、運営にあたることは望ましいことである。しかし、準備段階から終了までには、種目の決定、会場や用具の準備、製作、練習や運営方法など多くの仕事があり、これらの準備や運営がスムーズに進行するように、教師と生徒による委員会を組織することが必要である。そのなかで、生徒が自主的に活動できるように、教師が適切な指導をすることである。この指導が学校レクリエーションとしての重要なポイントになるだろう。

9. 準備や練習の日数と体育授業への影響

〔表8〕 準備や練習の日数

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
10日以内	30	65.2	17	80.9	10	50.0	57	65.5
11日～20日	9	19.6	3	14.3	6	30.0	18	20.7
21日～30日	2	4.3	-	-	3	15.0	5	5.8
無記不明	5	10.9	1	4.8	1	5.0	7	8.0
計	46	100	21	100	20	100	87	100

表8によると「10日以内」が57校65.5%ついで「11日～20日」が18校20.7%である。残りは20日以上である。ということは10日以内で行なうのが2/3であることを示す。

練習を行なうための体育授業への影響を調べ

ると「ほとんど影響がない」が35校40.2%「授業が練習時間にふりかえられ学習内容がカットされる」が32.2%「授業によい影響を与え積極的参加」が16校18.6%となっている。「練習で疲れて授業に悪い影響を与える」はわずか2校である。このことは、年間計画のなかに練習時間を組み込んでいないのではないか。体育祭や運動会を実施する場合、当然準備や練習の時間が必要である。学校行事の1つである以上、年間計画を作成する場合に、練習時間を組み入れること、その時期に体育授業の教材、例えば体操、ダンス、陸上競技などのカリキュラムをたてるべきである。また、生徒が疲労しないよう無理な練習はさけること、そのためには効果的な練習や準備によって、運動への関心や理解を深め、授業への積極的参加などのよい影響を与えるようにすべきである。

10. プログラムについて

体育祭や運動会のプログラムづくりは、学校レクリエーションとして重要なポイントになる。

さて、プログラムは誰れが作成するかを表9〔表9〕 プログラムはだれが作成するか

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
生徒(会)	23	50.0	12	57.1	6	30.0	41	47.2
生徒と教師	21	45.7	9	42.9	11	55.0	41	47.2
教 師	2	4.3	-	-	3	15.0	5	5.6
計	46	100	21	100	20	100	87	100

でみると、「生徒(会)中心」が41校47.2%、また「生徒と教師」が同じく41校47.2%である。「教師」が5校5.6%と極めて少ない。従来は教師中心にプログラムを作成していたが、現状では生徒の意向を十分反映していることがわかる。レクリエーション行事としては大切なことである。

表10はプログラム(種目)性格別内容を示

〔表10〕 プログラムの性格別内容

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
イ 競技的種目中心	17	37.0	8	38.1	9	45.0	34	39.1
ロ レクリエーション的種目中心	14	30.4	6	28.5	1	5.0	21	24.1
ハ 発表会的種目中心	1	2.2	-	-	-	-	1	1.2
ニ 競技的種目とレクリエーション的種目を半々	7	15.2	4	19.1	5	25.0	16	18.4
ホ 総合的(イロハを含む)	7	15.2	3	14.3	5	25.0	15	17.2
計	46	100	21	100	20	100	87	100

したものである。表10によると「競技的種目中心」に行なっている学校は34校39.1%で最も多い。ついで「レクリエーション的種目中心」に行なっている学校は21校24.1%である。レクリエーション的種目を行なっている学校は私立校よりも公立校に明らかに多い。

「発表的種目中心」に行なっている学校は公立普通校1校だけである。

「競技的種目とレクリエーション的種目を半々」に行なっている学校は16校18.4%、「各種目を総合的」に行なっている学校は15校17.2%である。こうしてみると、調査校の半数以上の学校が、競技的性格とレクリエーション的性格の強い体育祭や運動会を行なっているといえる。

〔表11〕 プログラムの種目内容

	体育祭13校		運動会6校		体育大会17校		全体36校	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
イ 陸上競技	56	22.5	40	29.0	121	36.9	217	30.4
ロ 球技・格技	-	-	-	-	26	7.9	26	3.6
ハ 体操・組体操・ダンス・マステゲーム	26	10.4	29	21.0	41	12.5	96	13.4
ニ レクリエーション的種目	121	48.6	46	33.3	98	29.9	265	37.0
ホ クラブ紹介・仮装行列・応援合戦	30	12.1	12	8.7	25	7.6	67	9.4
職員・父兄への種目	16	6.4	11	8.0	17	5.2	44	6.2
計	249	100	138	100	328	100	715	100

また、調査校のうち入手できた36校のプログラムの内容を分析してみると表11になる。

表11.によると名称は体育祭13校、体育大会17校、運動会6校となっている。内容は陸上競技、球技、格技、体操・ダンス・マスゲーム、レクリエーション的種目(競争遊戯など)、クラブ紹介・仮装行列・応援合戦、職員、父兄の種目に分けた。陸上競技では、短距離、長距離、リレー、ハードル走などであるが、リレーが最も多い、また、走り高とび、走り巾とび、砲丸投なども行なわれている。球技では、ソフトボール、バスケットボール、バレーボール、ハンドボール、サッカー、卓球、テニスなどである。レクリエーション的種目では、障害物競走、百足競走、パン食い競走、借り物競走、綱引き、棒倒し、騎馬戦などである。仮装行列や応援合戦なども考え方によってはレクリエーション的種目に入るが、ここでは一応別にした。そこで体育祭の内容をみると「レクリエーション的種目」が48.6%、ついで陸上競技22.5%である。しかし、「クラブ紹介、仮装行列、応援合戦」などを含めると、レクリエーション的性格が強いスポーツの祭典であるといえる。運動会はレクリエーション的種目33.3%ついで陸上競技29.0%体操、組体操、ダンス、マスゲーム21.1%の順であり、レクリエーション的性格と競技的性格と発表的性格をもち合せた総合的運動の会といえる。体育大会は、陸上競技36.9%、ついでレクリエーション的種目29.9%であるが、体育祭や運動会にみられない「球技・格技」が7.9%と目立つ。ということは、体育大会はレクリエーション的性格を持っているが、どちらかという競技的性格が強いといえる。

11. 経 費

表12によると費用の出所は「学校予算と生徒会費」が58校66.9%で最も多い。ついで

「学校予算に生徒の一部負担」が26校29.8%である。「学校予算にPTAなどの寄付」は3校3.3%である。

〔表12〕 費用の出所

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
学校予算・生徒会費など	32	69.6	13	61.9	13	65.0	58	66.9
学校予算+PTAなどの寄付	-	-	1	4.8	2	10.0	3	3.3
学校予算+生徒の一部負担	14	30.4	7	33.3	5	25.0	26	29.8
計	46	100	21	100	20	100	87	100

費用の用途は、準備費、用具費、接待費、宣伝費、賞品代などである。生徒会の負担は主に装飾費や応接費などに使われている。一部の学校では生徒の負担金が高額のため問題になったことがある。体育祭や運動会に多額の費用をかけなければ立派なものができないという考えはよくない、むしろ少額の費用で立派な企画や運営をすることが大切である。

12 体育祭や運動会の実施上の問題点

体育祭や運動会を実施する上でいろいろ問題がある。表13はその問題点を示したものである。表13によると、「企画と運営指導」が87

〔表13〕 体育祭、運動会を行なう場合に問題となる点 (2項目選択)

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	46校	%	21校	%	20校	%	87校	%
練習時間の確保	15	32.6	8	38.1	9	45.0	32	36.8
他教科との関係	8	17.4	6	28.6	8	40.0	22	25.3
企画・運営指導	28	60.8	13	61.9	3	15.0	44	50.6
施設・用具の不足	2	4.3	4	19.0	5	25.0	11	12.6
全員参加の問題	14	30.4	3	14.3	7	35.0	24	27.6
費用がゆかぬ	6	13.0	8	38.1	1	5.0	15	17.2
その他・無記不明	3	6.5	1	0.5	3	15.0	7	8.0

校中44校と最も多い。体育祭や運動会はなんといっても企画、運営が大切で問題になるのは当然である。ついで「練習時間の確保」が32校、また、これに関連して「他教科との関係」が22校みられる。ということは、学校行事でありながら、体育時間に多くのしわよせがくると関連がある。また、練習のために多くの時間を消費することも検討する必要がある。多くの練習を必要としない企画を考慮すべきである。

「全員参加の問題」は24校である。学校規模が大きくなると、全員参加は徒手体操位で、あとは代表や選手参加ということになる。誰もがそれぞれの技量に応じて参加できる手軽な種目、例えばフォークダンスやゲームなどももっと入れるとよいだろう。

さて、「費用がかかる」は15校、「施設、用具の不足」は11校である。費用の問題は、出来るだけかからないように企画の段階で考えることである。施設や用具の不足は、種目内容の範囲を狭めればよい、みる体育祭からする体育祭へ発展させること。最後に一部の教師に負担がかからないように、出来るだけ多くの教師が協力し合って指導すべきである。学校行事であるからには当然のことである。

13. 体育祭や運動のあり方について

〔表14〕 体育祭や運動会のあり方

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
教科体育の発展の場となるようにすべきである	16	34.8	4	19.0	4	20.0	24	27.6
学校の実態や生徒の運動生活に応じて行なうべきである	14	30.4	6	28.6	6	30.0	26	29.9
生徒・教師・父兄間の人間関係を好ましくすることをねらいにすべきである	11	23.9	9	42.9	10	50.0	30	34.5
その他・無記不明	5	10.9	2	9.5	-	-	7	8.0
計	46	100	21	100	20	100	87	100

表14によると、体育祭や運動会のあり方は、「生徒・教師・父兄の人間関係をよくするというねらいで行なうべきである」が30校34.5%と最も多い。ついで、「学校の実態や生徒の運動生活に応じて行なうべきである」は26校29.9%である。「教科体育の発展の場となるようにすべきである」は24校27.6%である。生徒、教師、父兄間の人間関係を問題にするのは公立実業校、私立校に多い傾向があり、教科体育の発展の場にするというのは、公立普通校に多いようである。

さて、体育祭や運動会のあり方には二つの方向が考えられる。一つは運動意欲の向上と体力充実を図り、教科体育の発展の場ともなるような、競技会的、発表会的性格のもの、もう一つは、生徒と教師や父兄間の人間関係の改善をはかること、すなわち、皆んなでスポーツを楽しむというレクリエーション的性格のものである。レクリエーションだからといって、簡単なものだけではない。多少苦しくても成功感や満足感を覚える内容のものも当然含まれる。これら二つの方向(内容)について、それぞれの学校が研究し、学校や生徒の特質に応じて企画すべきである。

要 約

福岡県下の高等学校(公立普通、実業及び私立を含む)102校に、体育祭や運動会の現状と問題点を調査した。その結果を要約すると、

1. 体育祭や運動会(体育大会を含む)を実施しているのは87校85.3%、実施していないのは15校14.7%である。

2. 名称は体育祭が44

校 50.5%と最も多く、ついで、体育大会 23校 26.4%、運動会 10校 11.5%、体育会と競技会がそれぞれ 5校 5.8%である。

3. 実施時期は 9月～10月が 82校 85.3%、残りの 5校 4.7%は 5月～6月に実施している。

4. 実施回数は年 1回実施が 66校 75.9%、2年に 1回は 12校 13.8%、年 2回実施は 3校 3.5%、3年に 1回は 2校 2.3%、3年に 2回は 4校 4.5%である。

5. 実施日数は 1日型が 74校 85.1%、教日型は 12校 13.7%である。

6. 実施日は、平日が 44校 50.6%、休日は 42校 48.2%、平日、休日と決めていないのが 1校である。平日に実施する理由として、教科体育の延長であるためが 19校、特別に理由はないが 12校、教師の勤務に都合がよいが 7校である。休日に実施する理由として、父兄に多く参加してもらうためが 23校、生徒や父兄の要望が 7校、地域社会の要望が 6校、特別に理由はないが 16校である。

7. 体育祭や運動会の目標は、「集団行動を通して社会性を育成する」が 51校、ついで「生徒会活動を充実させる」が 47校、「運動意欲の向上と体力の充実を図る」が 38校、「運動への関心や理解を深める」が 16校、「教科体育の成果を地域社会に公開する」が 11校である。

8. 企画、運営は「生徒と教師が協力して行なう」が 63校 72.4%、ついで「生徒が中心に行なう」が 23校 26.4%、「教師が中心に行なう」は 1校である。

9. 準備や練習の日数は「10日以内」が 57校 65.5%、ついで「11～20日」が 18校 20.7%、残りは 20日以上である。

練習を行なうための体育授業への影響は、「ほとんど影響がない」が 35校 40.2%、「授業

が練習時間にふりかえられ学習内容でカットされる」が 32.2%、「授業によい影響を与え積極的参加」が 16校 18.6%、「練習で疲れて授業に悪い影響を与える」はわずか 2校である。

10. プログラムの作成は「生徒(会)中心」と「生徒と教師」がそれぞれ 41校 47.2%である。「教師のみ」は 5校 5.6%である。

プログラムの性格別内容をみると、競技的種目中心は 34校 39.1%、ついで、レクリエーションの種目中心は 21校 24.1%、発表的種目中心は 1校である。また、競技的種目とレクリエーション的種目を半々に」は 16校 18.4%各種目を総合的には 15校 17.2%である。

11. 費用の出所は「学校予算と生徒会費」が 58校 66.9%、「学校予算に生徒の一部負担」が 26校 29.8%、「学校予算に P T A などの寄付」は 3校 3.3%である。

12. 体育祭や運動会の実施上の問題点として、「企画、運営指導」が 44校 50.6%、ついで「練習時間の確保」が 32校 36.8%、また「他教科との関係」が 22校 25.3%「全員参加の問題」が 24校 27.6%、「費用がかかる」が 15校 17.2%、「施設・用具の不足」が 11校 12.6%である。

13. 体育祭や運動会のあり方をみると、「生徒・教師・父兄間の人間関係を好ましくすることをねらいにすべきである」が 30校 34.5%、ついで「学校の実態や生徒の運動生活に応じて行なうべきである」が 26校 29.9%、「教科体育の発展の場となるようにすべきである」が 24校 27.6%である。

あ と が き

学校レクリエーションの一環として、福岡県下の高等学校の体育祭や運動会の実態を明らかにした。また、いくつかの問題点が浮きぼりにされた。なかでも、企画、運営、指導が一番問題

となっている。

体育祭や運動会の企画を考える場合、まず第一に基本の方針の確立、目標の設定である。日常の体育学習の成果の発表を中核とするのか、教師や生徒、父兄を含めて健康で、明るくなごやかな人間関係づくりに貢献させるのか、また、地域社会の理解と協力をねらうのか、などの方針を明らかにすることである。それにもとづいて指導計画を作成し、プログラムを企画すべきである。とくに、プログラムが形式化、固定化、マンネリ化の傾向があるときは、アイデアを生かした新鮮さのある種目を考えるべきである。体育祭や運動会は学校行事として、生徒全員参加が当然である。全員参加であれば運動技能の低い生徒や、運動欲求の弱い生徒が喜んで参加しやすいプログラムを考えなくてはならない。それには勝敗にこだわる競技的性格の種目より、それを行なうこと自体に楽しさを求めるレクリ

エーション的性格の種目を多くして欲しい。種目のみではない、開会や閉会の形式や昼休み時間の生かし方など、アイデアを生かしてレクリエーション的なつどいを計画してよい。それぞれの学校で独特の体育祭、名物的な運動会を企画することが大切である。企画の段階では、生徒の欲求やアイデアを必ず取りあげ、自らの、我々の体育祭や運動会であるという意識を強く持たせることである。運営についても、練習時間や準備時間を多くとらなくてすむように合理化を考えること、過去の経験を生かしながら、常に現代化をはかることを忘れてはならない。

最後に体育祭や運動会を企画、運営、指導する人たちにレクリエーション理論や技術をもっと学んでいただくことを要望する。

この研究は朝長裕介（福岡工業高等学校）との共同研究であることを付記する。